

実践の心を学ぶ

—堀合文子先生の実践ビデオから—

関口 はつ江

急がれる実践の改善

今、保育の場合は、園児減少や親の変貌、子育てコストの削減のための行政施策など、社会的な波を乗り切ることに迫られている観があります。保育の専門的役割も広がり、高度な知識をもつ保育者への期待もあります。

しかし、最近痛感するのは、激変する生活環境によって子ども自身が大きく変わってきている時であるにもかかわらずに、保育の周辺や理論は語られても、子どもの状態（特に内面）の実際が語られず、今の保育が子どもの発達のニーズに合っているのか、子どもとの接点での細かい保育者の行動がこれでよいのかとの具体的な問題や方法の問い直しが少なく、過去の保

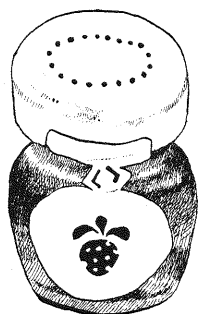
保育の一般論による方法が踏襲されていることです。保育は実践ですから、いくら理論があっても、それが対象に应じて的確に具体化され、子どもに効果がなければ何にもなりません。「保育はこうあるべき」、「こういうことをするのが保育」という固定化、形式化された考えが保育者の行動を縛り、自分の目で見、子どもの気持ちに触れて感じたことから発した行動が抑えられ、理屈に照らした行動が優先するとすれば、子どもと保育者の生活は交わらず、子どもも保育者も「共に生きた」保育ではなく「何かをこなした」にすぎなくなります。

本来子どもに最も敏感なのは日々子どもとかかわっている保育者です。目前の子どもに即して優先すべきこと、有効な方法などは、保育者が保育行為をしながら直接掴み、経験として蓄積されます。それは研究者による客観的研究とは異質な、それに先立つ実践のための最前線の貴重な資料です。優れた実践の中で確かめられていることを、実践者が行為レベルで共有する

ことが保育の改善のためにことのほか重要で、若い保育者の保育実践家としての保育力の低下が懸念される昨今、経験者から保育の奥義が伝わらないことも一因かと思われます。

堀合先生の実践ビデオから―発想を変える―

「保育者」はまずどのような心がけで子どもに向かい、子どもの何を捉え、それをどのように考え、どう対応して保育を作り上げているのでしょうか。「堀合文子先生の保育実践ビデオ」はそれを伝える目的で作られました。堀合文子先生（元お茶の水女子大学附属幼稚園教頭、現十文字幼稚園主事）は倉橋惣三先生の教えを受け、それを実践で示しつつ保育者として六十



年近く第一線で活躍、積極的に啓蒙活動もされています。そこから学べることは尽きません。堀合先生が常におっしゃる言葉は「今年の子どもは昨年の子どもとは違います」「保育者が変わらなければならないのです」ということです。この二つのことは誰もが知っていることですが、それがどう実際化されるか、それによって子どもがどう育ってくるのか、保育場面の映像とテロップの質問に答える形で先生ご自身の解説で示しています。堀合先生担任の幼稚園三年保育クラスの成長過程を追い、主要な場面での保育者の意図や背後にある考え方を説明します。年少、年中組は五月と十一月の二本、年長組は五月、十一月、三月の三本（各約五十分）にそれぞれ一日の生活を映し出す計画で今、二年目制作中です。

先生の保育は、子どもの「今」に応じる際にその時のことだけでなく、瞬時に前の経験、後の発達を考える深さがあること、活動へのかかわりや手のかけ方は子どもの細かい観察抜きではしていないこと、一つの

原理的な発想の具体化は相手によって微妙に変えていることなどが映像と説明から捉えられます。さらに、実際の動きと説明の関連について視聴者が考察をすれば、保育者の意識と行為への現れ方の間についての洞察も可能になり、保育行為の理解へと一層進めることもできましよう。このビデオの利点がここにあります。幾つかの場面を紹介します。

三歳児保育の鍵

「先を見通す」

* 子どもの身支度を丁寧に手伝う先生……

文字「なぜ、自分のことは自分でさせないのですか？」

昔はやって貰いましたが、今はそのような表面的な要求よりも、その子のもっている能力を出して使えるようにするために穏やかな雰囲気、安定出来る場所にしなければならぬのです。やって上げることの意味にはいろいろなことが含まれています。私がやって上

げると一年後には黙っていても自分でやる。しかも正しく。今やりなさいといって任せておくと、三歳なら三歳のレベルですからちゃんとやらないでしょ。

* 遊び場面の散らかった遊具をまとめたり、動かしたりする

文字「遊具を手まめに片づけていますが？」

その方がよく遊びますし、将来大きくなった時に散らかっていても平気でいるようでは困るから、そういうことも考えています（写真1）。

* 子どもが描いたお面を切り、ベルトをつけてお面にし、頭にかぶせてやる

文字「お面などをよく作って上げていますが？」

三歳児の今、仕事を上手にしてくれることは望んでいません。私が作ってやった方が後でやってくれることが分かっていきますから。今は要求を入れて上げることが大事。それと作った物で遊ぶこと。今は遊んで欲しい。仲良く遊んで欲しい。将来は考えて遊んで欲しい。それに必要な物は作って上げましょうということ



▲写真1 遊具をまとめる

になる（写真2）。

「子どもを見る」

* お弁当箱を自分でかばんに入れたのに、先生が取り出してやり直しをしている

文字「お子さんが自分でやったことを先生がやり直していますか？」

袋に入れないでかばんに入れたでしょ。本人も何か変と思っているのか少し躊躇してましたよね。自分で袋に入れてかばんに入れた時は、それが下手でもやり直しはしません（写真3）。

* 男の子が盛んにけつたりポーズをとって戦いごっこをしているが、先生は所持品の始末などをしている文字「戦いごっこへの注意は？」

見てないように見えますが、私は相当によく見ています。ひどいときには『それはちょっとやり過ぎね』と注意します。やらせっぱなしだとひどいことを平気でやるようになってしまいます（写真4）。

* 先生は遊びに入らないのですか？（砂場、積木など



▲写真2 おめん作り



▲写真3 お弁当のかたづけ



▲写真4 戦いごっこ

子どもの遊びのそばには行くが中に入らない)

それはこの頃、今年からです。入園した時どんなお子さんか数日間よく見ます。そこで、あまり遊びに入ってはいけなと思います。みんながこっち向いて「どうするの?」というような子達であると気づいたから。今年は言葉は相当にとりました。今は音や話が氾濫しているから子どもの中に入っているし、受け身の立場が多い。私がある上にああこう言ったらますます受け身になるでしょ(写真5)。

(十一月ビデオの子ども達は友達同士で本当によく遊び、生活習慣も出ています)

子どもの生活が深まるには

このビデオの保育場面では、保育者は大人として自然に振る舞い、子どもは自分たちの世界を安心して展開しています。大げさなこと、不自然に感じることはありません。子ども達は自分たちの遊びに打ち込みます。それは保育者が全神経を使って、今のこの場に



▲写真5 すべり台での遊び

る子ども達に気配りをしながら、子どもに向かつては穏やかなことばと素早い反応をして、子どもへの心の負担をかけない保育をしているからでしょう。

「三歳の時に相当に細かいところまで考えています。

それは一学期も二学期も同じです」と言う、締めくくりの先生の言葉がすべてを表しています。子どもの行動や状態をすべて自分に投げかけられたこととして受け止める「場を担う意志」、保育者に差し向けられた思いやその表現へのよりよい応え方を模索する「探求心」、保育者自身の行動を子どもの側にたって適切にコントロールする「理性と努力」、保育者自身の調和的な「生活観、発達観」などが先生の動き、視線、表情、言葉などに表れていて、画面を通して伝わってきます。

プロのカメラマンが捉えた実際の一日をそのまま編集していますから、保育にかかわる様々な立場の方が討論し合う余地もあるビデオです。

最後に津守貞先生（お茶の水女子大学名誉教授）の

推薦の言葉を一部引用させていただきます。

「堀合先生のクラスには私はお茶の水女子大学時代を通して殆ど毎日通っていました。どの子どもも心から満ち足りて一日を過ごすのを見て私自身も満ち足りて研究室へ帰るのが常でした。（中略）先生の保育は一人一人に応えるものですから、子どもが変われば先生の保育も変わります。しかも、どの子も精一杯遊ぶという点では共通と言えます。今なお、少しの気のゆるみもなく、同じように保育を続けておられる姿に励まされます。（後略）」（鶴見大学短期大学部）

堀合文子先生の保育ビデオ

三歳児編 二本完成販売中 四歳児編 二本十五年二月完成予定

五歳児編 三本本年度予定

制作 実践保育研究会（東京都豊島区雑司ヶ谷一―二十五―

一 雑司ヶ谷幼稚園内）

問い合わせ先 ○三―三九八七―三五三七